

平成 29 年度鹿児島大学公開講座「新しい総合計画づくり」 第 3 回 開催結果報告

1. 目的

第 5 次垂水市総合計画を策定するにあたり、市民と行政が本市のまちづくりにおける課題について認識を共有するとともに、課題に対する市民の考えやアイデアを把握し、計画に反映させるため。

2. 開催概要

開催概要は以下のとおり。

なお、テーマは、第 4 次総合計画の政策に対する市民満足度調査結果において、市民からのニーズが高い「医療・介護体制の充実」、「働く環境の充実」、「子育て支援策」の 3 テーマとし、第 3 回は「子育て支援策」とした。

〔第 2 回 開催概要〕

| | |
|------|--|
| 日時 | 平成 29 年 7 月 23 日（日）13 時 30 分～16 時 |
| 場所 | 市民館大ホール |
| テーマ | 垂水の子育ての魅力を高めていくためには？ |
| 参加者 | 67 名（市民 31 名、職員 36 名） |
| 主な内容 | <p>(1) 開会／市長あいさつ</p> <p>(2) 公開講座の概要説明「市民公開講座の目的」 鹿児島大学法文学部法経社会学科 小栗 有子 准教授</p> <p>(3) ガイダンス「垂水の子育ての魅力を高めていくためには？」 鹿児島大学教育学部 前田 晶子 准教授</p> <p>(4) ワークショップ 「教育サービスを超えて、 どんな『垂水らしい風』を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？」</p> <p>A 班 「『育ってほしい子どもの姿』と現実の子育てとのギャップを どう埋めたらいいだろうか？（成長に応じた備えの観点から）」</p> <p>B 班 「『育ってほしい子どもの姿』と現実の子育てとのギャップを どう埋めたらいいだろうか？（親の仕事・生活の観点から）」</p> <p>C 班 「『育ってほしい子どもの姿』と現実の子育てとのギャップを どう埋めたらいいだろうか？（学校教育の観点から）」</p> <p>D 班 「『育ってほしい子どもの姿』と現実の『子育て支援』とのギャップを どう詰めたらいいだろうか？（地域づくりの観点から）」</p> <p>E 班 「『育ってほしい子どもの姿』と現実の『子育て支援』とのギャップを どう詰めたらいいだろうか？（健やかなからだづくりの観点から）」</p> <p>(5) 発表と講評</p> <p>(6) 閉会／副市長あいさつ</p> |

3. 講演、グループ討議要旨

以下、講演及びグループ討議と講評の要旨をまとめている。

(1) 公開講座概要説明「市民公開講座の目的」

～鹿児島大学法文学部法経社会学科 小栗 有子 准教授

小栗准教授より、公開講座の目的と意義、第3回のテーマ及びワークショップの進め方について説明（説明内容は第1回開催結果報告を参照）。

(2) ガイダンス「垂水の子育ての魅力を高めていくためには？」

～鹿児島大学教育学部 前田 晶子 教授

教育サービスの先にあるもの

子育てに関する意見は非常に多様であり、どのような子育てが理想であるかは漠然としている。そこで、いくつか視点を挙げるので、本日のワークショップの参考にしていただきたい。

スライドの「サービスの先にあるもの」(※)は、第4次垂水市総合計画の中で教育に関する施策として挙げられ、現在取り組まれている。行政が提供するサービスが、この5年間でもたくさんあると実感する。しかし、これら多くの教育サービスを利用したからといって、理想とする子育てができていると単純に言えるだろうか。いくら多くの教育サービスを単にサービスの受け手として受けても実現したい子育てには、なかなかつながらないのではないか。

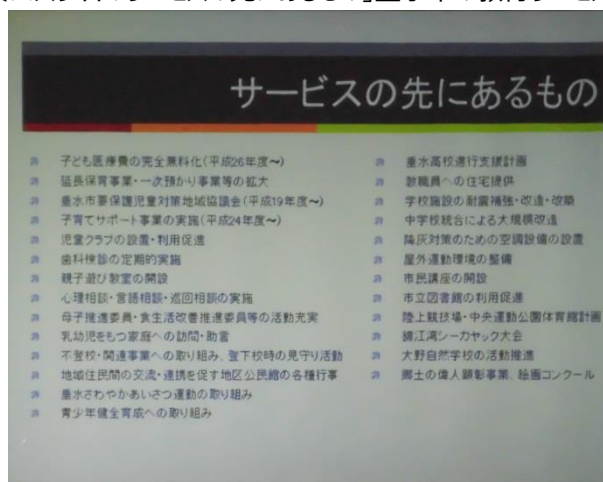
第5次総合計画で掲げる教育については、サービスの先にあるもの、つまり、サービスをもっと充実させるため、サービスを意味のあるものにするために、どのような子育てが行われることが大事なのかを考えるべきだろう。そこで、このワークショップでは、まず、子どもが育っている先の姿を想像してみよう。どのような姿に育ってもらいたいのか、様々な意見が出てくるだろうが、それをみんなで共有したい。

ワークショップ

テーマとしてA・B・C班では「育ってほしい子どもの姿」について、D・E班では「子育て支援」について話し合っていたが、垂水らしい子育ての“風”について最後にまとめたい。

先程、小栗先生の話の中で、垂水らしい“風”をどう活かすかとあったが、これは本ワークショップのテーマについて事前協議をしていたときに出てきた話である。子どもは育てられるものなのか、それとも育つものなのかという議論になったときに、本当は、子ど

〔※スライド「サービスの先にあるもの」垂水市の教育サービス〕



もは自分で育つのであって、周りの環境や大人はそこに吹いている“風”であり、子どもはその“風”に吹かれながら育っているのではないかという話になった。そうであれば、子どもに向かって、垂水でどんな“風”を吹かせたいのか、が本市で目指す子育て像になるのではないだろうか。

①子育てはリサイクル

自分が思い描く子育ての理想像は、自分がどう育ってきたかに大きな影響を受けている。親が共稼ぎで祖父母に面倒を見てもらっていたことから、自分も働き続けたいと思うきっかけとなった。つまり、子育ては少なくとも3世代に渡って、影響を及ぼし合っているのではないか。「子育てはリサイクル」と書いたが、子どもが育って欲しい姿を考えたときに、おそらく自分の子ども時代の経験も思い出されるのではないかと思う。

②子どもの育ちの中に地域の魅力をみる

1959年に浦安小学校6年生が共同して作った版画(※)を見ていただきたい。制作に一月かかっており、朝の風景がよく描かれている。このような子どもの作品の中に、地域の良さ、魅力が滲み出ていると思う。垂水の地域には自然環境などの様々な良さがあると思うが、最終的には子どもの作品や育ち方に、地域の良さが血となり肉となって表れること、あるいは子どもが地域の良さを自分の中に宿して、大人になってもその原風景に立ち返れることこそが、地域の魅力となるのではないだろうか。育ちの中に地域の魅力を見ることが2つ目の観点である。

〔※スライド「②子どもの育ちの中に地域の魅力をみる」〕



さらに、版画に描かれている大人のように、地域の魅力は、その地域にいる人間(大人)の魅力ではないだろうか。様々な人生の波を乗り越える大人たちの生き様が、子どもが描く「地域」なのだろう。

③人をつなげる子育てを

1955年の兵庫県豊岡市の先生と子どもたちの写真を見ていただきたい。出版された「村を育てる学力」で、東井先生は「学校で学ぶ学力というのは村を救う学力になっているのではないだろうか」といっている。しかし、村を育てる学力に取り組みたいという思いで、このタイトルがついている。

〔※スライド「③人をつなげる子育てを」〕



その当時は村があり、子どももたくさ

んいて、地域のつながりがあったが、現代は少子化、過疎化が進み、村を作る、地域を作る学力がなければ、次の段階である村を育てる学力にいかない状況がある。村を作る、地域を作る学力を子どもにつけさせるためには、子育て自体が、人と人をつなげる形でなされていなければ、子どもも地域づくりに参加しようとは思わない。

D・E 班では、子育て支援において、人をどうつなげていけばよいか考えてほしい。どういうつながりを重視するのか、どこがつながらないのかといったことを議論してほしい。

ワークショップ

前半の A・B・C 班は、子育て中の方は育てて欲しい子どもの姿を想像して、教育サービスの受け手の立場から、どんな“風”が吹いてほしいか議論してほしい。後半の D・E 班は、教育サービスを提供する立場から、どんな“風”を吹かせたいか、議論してほしい。

最後であるが、第 4 次総合計画から言葉をもらってきたが、総合計画に挙げる政策は、すべての市民に対して差別なく平等に行われるもので、それは市民を大切にすることであり、市民の生活や地域に密着した、ふるさと垂水を愛し、誇りにすることを目指す内容にすることが重要になる。本日のワークショップは、いきいきと楽しく交流し、皆さんと一緒に学び合いたいと思う。



■ 市長開催あいさつ



■ 小栗准教授による講座説明



■ 前田准教授によるガイダンス

(3) ワークショップと講評

① テーマ : 「教育サービスを超えて、

どんな『垂水らしい風』を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？」

サブテーマ:

○「育ててほしい子どもの姿」と現実の子育てとのギャップをどう埋めたらいいだろうか？

(教育サービスを受容する側：自らも吹かす「風」を問い直す)

A 班 成長に応じた備えの観点から

B 班 親の仕事・生活の観点から

C 班 学校教育の観点から

○「育ててほしい子どもの姿」と現実の「子育て支援」とのギャップをどう詰めたらいいだろうか？

(教育サービスを提供する側：吹かせる「風」を問い直す)

D 班 地域づくりの観点から

E 班 健やかなからだづくりの観点から

② 各班のワークまとめ

A班

どんな「垂水らしい風」を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？
～「育ってほしい子どもの姿」と現実の子育てとのギャップをどう埋めたいか？～

成長(未就学児→小学校→中学校→高校・大学)に応じた備えの観点から

育ってほしい子どもの姿とは？

- ・よわいものいじめをしない、されない子ども
- ・体も心も元気で思いやりの気持ちを持っている子
- ・思いやりのある優しい子
- ・地元をステキな場所だと分かって守って欲しい
- ・自然の中で楽しい事、危ない事などたくさんの経験をして欲しい。子どもたちも垂水が好きになれる
- ・地域の文化を理解し、大切に育てて欲しい
- ・育てやすい場所、各地域の色にあった市営住宅があるといい(水之上→農家。海潟→漁師とか)。子どもがいる世帯で、子育てしやすく、仕事しやすい
- ・素直
- ・笑顔を大切に
- ・健康、優しさ、かしこさ
- ・不安や悩みを親に相談できる子ども
- ・垂水で育った美味しいものを食べられる機会
- ・近所づきあいができる子ども

困っていること

医療支援

- ・垂水ですぐに病院にかかることができない
- ・(信頼できる)小児科が少ない
- ・産む場所がない。病院までの交通費がかかる
- ・医療機関が充実していない
- ・保健師さんと意見が合わない

どうやって改善できる？

- ・産科への交通費を市で出して欲しい
- ・入院をやめた病院での病児保育
- ・子育て中の保健師さんがたくさんいると良い

経済支援

- ・医療費の手出しの支払い(0にしてほしい)
- ・保育料
- ・学校の遠足にバス代がかかる
- ・ミルク代、オムツ代への出費大

- ・児童手当増額。年齢 18 歳まで
- ・企業誘致

成長面支援

- ・学童、遊ぶ場が少ない(公園の整備)
- ・小学生以上が遊べる場、プールがない
- ・近所に子どもが少ない
- ・自然にふれられる場所が少ない
- ・核家族なので、家事育児がたいへん(→給食サービス等利用したかった)
- ・住む場所がない
- ・病気の時、預ける所がなく困った(未就学)

- ・遊ぶ場～直す、つくる 室内遊園地
- ・学童を作る(市又は保育園)
- ・市立自然公園を作る(国立公園の市民バージョンみたいな)
- ・子どものいる世代が利用しやすい垂水産の食材を使った食堂を作る
- ・産後、掃除、洗濯サービス
- ・産後、0歳児のいる家庭に給食サービス
- ・給食サービスを産後にも利用できるように
- ・子育て世代用の住宅を作りたい
- ・子育て世帯をもっと移住してこられるように窓口

次頁に続く

～前田准教授の講評～

- ・小さい子どもを持つ親が多いのか、非常に具体的な要望がたくさん出された。
- ・子どもの姿と日常をどのようにつないでいけばいいのか。サービスの支援を超えた、垂水らしい子育てを考えるならば、各家庭が困っていること、何のために支援するのかをつなげるために、すべての子どもがこんなふうに育ってもらいたいという姿を共有しておく必要がある。具体的な支援と、それがどうつながるのか考えなければならない。
- ・また、サービスは行政から家庭への直線的な（一方的な）つながりだけでいいのだろうか。間接的な支援もあるだろう。市民の関わりなどの方法もあるのではないか。家庭と行政の支援だけではない、サービスの広がりを考えていかなければならないのではないかと思った。

どんな「垂水らしい風」を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？
 ～「育ってほしい子どもの姿」と現実の子育てとのギャップをどう埋めたいか？～

親の仕事・生活の観点から

育ってほしい子どもの姿とは？

- ・健やかに過ごし、平等な教育がうけられる
- ・元気で明るい子ども
- ・素直に育ってほしい
- ・自分らしく、のびのびと自己表現をできるように
- ・垂水に生まれ育ってよかったと思える子に
- ・人に感謝できる子ども
- ・たくさんの人と関わりを持ち、たくさんの経験をして、やがて自立してほしい
- ・あいさつ、礼儀がしっかりできる子ども
- ・自分の意見がしっかりとと言える子ども
- ・相手・まわりに対して配慮出来る子
- ・挨拶のできる子ども
- ・幅広い世代の人とふれあってほしい。
- ・人に優しく
- ・思いやりをもてる子ども
- ・困っている人を進んで助けられる子ども
- ・誰とでも話ができる子ども



育ってほしい子どもの姿と現実の子育てとのギャップ、課題

- 病児保育
 - ・子どもが病気になったとき
 - ・保育所の休日・夜間対応
 - ・病院の存在（小児科）、安心感
- その他、周りの理解
 - ・休みたい時の職場の理解
 - ・保育所付の職場
 - ・事業所の子育てに対する理解の周知
- ふれあえる場の確保（地域でのふれあい）
 - ・親の振替休日などに子どもの行く所がない
 - ・子どもたちを見守ってくれる場所の確保
 - ・垂水市の中の地域の一体感（学童保育…その中で、たくさんの人と関わり、垂水に生まれ育ってよかったという気持ちを育み、あいさつ・礼儀などの基本的教育を行うことが可能）
 - ・学童保育の確保（歩いて行ける所）
 - ・ファミリーサポートセンターの設置



学童保育、医療体制・サービスの充実

～前田准教授の講評～

- ・仕事、生活と子育てをどう考えるか。仕事について、保護者や近所の方などの周りの人がどれぐらい理解してくれているのだろうか。仕事をしている親の忙しさや大変さはなかなか理解されない。労働の価値と子育ての大変さを考慮し理解しあうことが、子育ての共感につながるのではないかと。すべての市民にとって働く価値は大事であり、同じであるということが、総合計画の中に盛り込まれたらよい。

どんな「垂水らしい風」を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？
 ～「育ってほしい子どもの姿」と現実の子育てとのギャップをどう埋めたいか？～

学校教育の観点から

育ってほしい子どもの姿とは？

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・思いやりのある子 ・明るい子 ・学力の高い子ども ・自立できる子 ・自分が好きな子 ・地域を大切にできる子ども ・国際力のある子ども ・相手の立場になって考えられる。 ・あいさつがきちんとできる（2件） ・コミュニケーションができる子 ・頼りあえる子 | <ul style="list-style-type: none"> ・素直な子 ・感性が豊かな子ども ・生活力のある子ども ・元気にのびのびと ・地元をほこれる子 ・何にでもチャレンジ ・友達を大切にする子 ・感謝の気持ちを持つ ・自分の思いを伝えられる子 ・皆で協力し合える子ども ・たくさんの友達に囲まれて笑顔あふれる |
|--|---|

- 家庭で過ごす時間を大切にする
- 垂水高校の魅力を小中学生に伝える機会をつくる
- チャレンジさせたくとも就業している親は難しい→巡回図書・学童保育の充実を図る
- 小さい学校ならではの連携体制、垂水の自然を生かす遊び場・公園を整備し、多学年・多年代との交流促進を図る
- 英語力向上（垂水に来れば英語力があがると言われるように）
- 働く場がない→ICT教育の充実
（子どもが帰ってこなくても垂水市にお金がおちるようにする）

～前田准教授の講評～

- ・ICT教育を充実させ、子どもたちが市外で働いても垂水は豊かになるという視点はすごい。他の班と違って、子どもを自立させていかなければならない、卒業後自活していく力をどうつけさせるかという、子育ての根幹の部分の話であった。子どもたちだけで遊ぶような自然や公園、子ども自身が“風”に吹かれる場、そういうところがなかなかできない。親が連れていくこともできない。学校が小さければ、経験も限られてしまうのではないかと。そういう思いがある。
- ・どうやったら自立できるのか、じっくり考えなければならぬことであるが、例えば厳しい環境の中で競争させれば自立するのか、それとも人がたくさん集まる場所の中で子どもの力だけで達成感が得られる活動をするとか自立につながるのか、あるいは突出した能力が身につけば自立できるのか等、本当に自立させるためにはどういう環境、“風”が必要なのかは単純ではないと思う。もしかしたら、学校教育だけでは完結しないのかもしれないが、学校が中心となって引っ張っていきべきであろう。

どんな「垂水らしい風」を吹かせて子育ての魅力を高めていか？
 ～「育ってほしい子どもの姿」と現実の「子育て支援」とのギャップをどう詰めたらいいか？～

地域づくりの観点から

育ってほしい子どもの姿とは？

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・心の強い子！ ・夢をかなえられる子 ・自分の意見をしっかり持った子(周りに流されない) ・趣味を大切に子(趣味を通じて世界と交流) ・健康で明るく活発な子(偏食なし、スポーツ好き) ・文武両道を兼ね備えた子 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分達で解決できる子 ・仲間づくりの出来る子 ・礼儀正しい子 ・社会生活でリーダーとなれるような人間 ・特色ある能力の子(運動、芸術、学力) ・思いやりがあり、広い視野がある人間 |
|---|---|



育ってほしい子どもの姿と現実の子育て支援とのギャップ、課題

- 少子化の現状、課題
 - ・小規模校では、放課後、人の多い少年団や塾に連れていっている
 - ・小規模校、子どもと高齢者の交流ができる
 - ・団体スポーツできない分、学力に力を入れる
 - ・小規模校同士の交流が必要
 - ・都市(鹿屋市、鹿児島市)の子どもと交流
 - ・団体競技ができない小学校がある
- 地域の現状、課題
 - ・若い人が振興会に加入していない
 - ・若い人が参加しやすい行事があったほうがよい
 - ・子供会に入っている人のほうが公民館活動も積極的である
 - ・柘原は地域の人の子どもの面倒を見てくれる(グランドゴルフ、プール、寺小屋、魚釣り)
 - ・中央地区、十五夜行事はする。横のつながりが薄い
 - ・日頃からの挨拶が大事
 - ・校区毎に海水浴場があればいい
 - ・ゆうすずみ会(新城)
 - ・大野盆踊り2年おきにした
 - ・行事多すぎたので減らした(松ヶ崎)
 - ・小学校までいけない高齢者がいる



少子化で地域行事が困難であるが、保護者を含めた参加により、地域づくりにつながっている

～前田准教授の講評～

- ・子育てにおいて、どんな行事があるのだろうか。
 (参加者より回答：農作業における田植え、餅つきの行事、年寄りと親しむ遊び、伝統行事、新城での「鎌手踊り」、村の行事、運動会、文化祭、正月の行事等、多くの行事がある。昨日も夏休みのふれあい活動を行った。)
- ・このような行事とは、絶対に家庭ではできないことであり、垂水に住んでいなければ経験できないことである。世代がつながることができたらよいだろう。

どんな「垂水らしい風」を吹かせて子育ての魅力を高めていくか？
～「育ってほしい子どもの姿」と現実の「子育て支援」とのギャップをどう詰めたらいいか？～

健やかなからだづくりの観点から

育ってほしい子どもの姿とは？

- 子どもの心
 - ・自分に厳しく、人に優しく
 - ・友人を大切にする、皆と仲良くできる子ども
 - ・人の痛みがわかる
 - ・親の手伝いができる子
 - ・自己肯定感が持てる子ども
 - ・ゲームだけでなく、自然の中で遊んで
 - ・きれいな物をきれいと言える素直な心の子
 - ・善悪の判断のできる子
- 自分の体・命を大切にする子
 - ・自分の命は自分で守る
 - ・料理等、日常生活が一通りできるようになる子
 - ・買い物から作って食べる、を子どもだけでやる
 - ・一人でも料理ができる子どもにしたい
 - ・男の子でも料理を身近に感じて育って欲しい
- 人の気持ちを大切にできる子に
 - ・困っている人に手を差し伸べられる子
 - ・笑顔のある子ども
 - ・本を好きになって
 - ・さわやかなあいさつのできる子になってほしい
 - ・自分の意見が言える子ども
 - ・優先順位を考えられる子ども
 - ・個食をなくしたい。食を通して笑顔に！
- 郷土愛
 - ・地元でとれる物を好きになって欲しい。
 - ・郷土の行事・料理など興味のもてる子（垂水愛）

現 状

- ・子どもにも大人と同じような意識で接している(あいさつ)
- ・夏休みは例年、孫に簡単な料理を手伝ってもらっている
- ・学校菜園の収穫物を一緒に料理する
- ・3カ月児へのこんにちは赤ちゃん訪問
- ・3ヶ月、6ヶ月児健診のお手伝い
- ・小学校での読み聞かせ
- ・親子料理のお手伝い
- ・各公民館で親子料理、男性の料理など
- ・パクパクもぐもぐ教室の支援
- ・ママ・パパ学級のお手伝い

何ができるか？何をやりたいか？

- 子ども食堂
 - ・各校区、子ども食堂一開店！
 - ・地域の皆さんに食材を支援してもらいたい
- 交流の場
 - ・多世代との交流の場 ・母親がほっとできる場所
 - ・転入・垂水出身以外の母親の友だち作りの場
 - ・小さなサロン（老人＋母親＋子ども）
- 訪問
 - ・声かけ訪問の充実(赤ちゃんへの訪問が1回だけなので)
 - ・支援センターに(行かない)行けない方への支援
- 情報発信
 - ・子育て情報の発信方法
- その他
 - ・乳幼児健診にゆとりを
 - ・お父さんの協力を得られる体制

課 題

- ・場所（各公民館）、人、材料（寄付）の確保と各機関の許可
- ・本当に来てほしい人が来やすいように、窓口を広げる
- ・妊娠期・乳児期からの母親同士がつながる場をつくる（母親学級・健診）
- ・顔を合わす回数を増やす（学校行事に参加）

次頁に続く

～前田准教授の講評～

- ・体や健康、食を中心に活動されているということで、声をあげられない子どもや家族も含めて、どうやって支援したらよいかを出されていたのが印象的であった。
- ・食とは、子ども自身が自立するための中核にあるところである。小さいときから、作ることからはじめて、食を体験させていることが分かった。同時に、家庭以外の場で、そういったことができる場が必要であることが分かった。物理的な場所もそうであるが、人が集まるような、人が出会う場を作っていく必要がある。場づくりがキーワードになるだろうと思う。

③ 前田准教授の総評

今日各班で議論した、育てて欲しい子ども像は重なっていると感じた。個として、一人の人間としての力をつけてほしい、集団として関係を作してほしい、この両方が出ていたことが印象的であった。それが共有されたのではないかと思う。

吹かれる“風”の先にいるのは子どもである。子どもも一人の垂水市民として、今の子どもたちの声が総合計画の中に盛り込まれたら良いのではないかと思う。

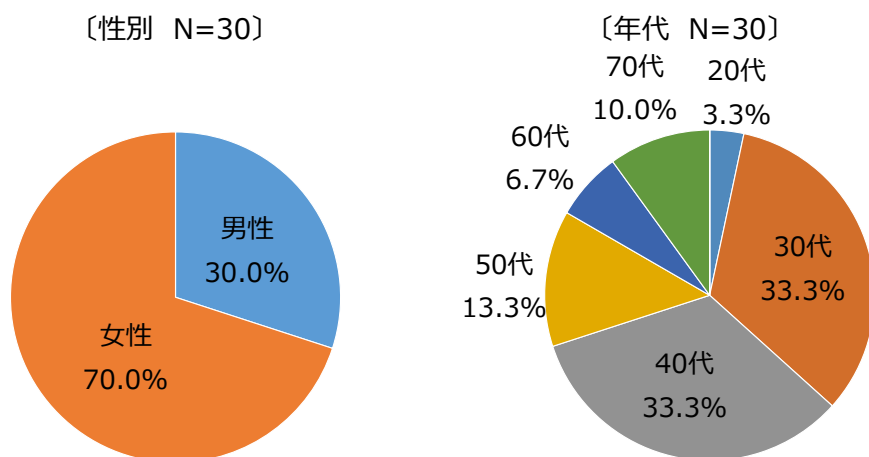


4. 参加者アンケート結果

市民の参加者には、公開講座に参加した感想やワークショップで感じたことなどを聞くアンケート調査を実施した。

アンケート調査結果は以下のとおり。

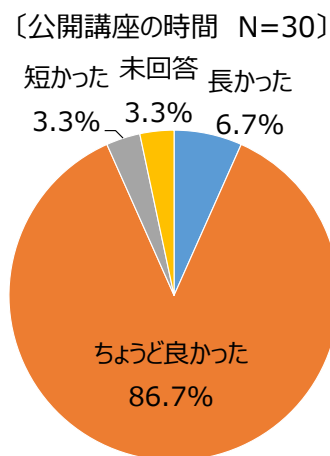
(1) 回答者の属性



(2) 調査結果

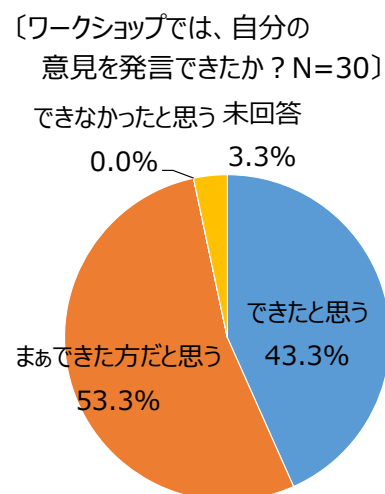
① 公開講座の時間

公開講座の時間については、「ちょうど良かった」が86.7%と8割を超え、最も多くなっている。「長かった」は6.7%、「短かった」が3.3%だった。



② ワークショップでは自分の意見を発言できたか？

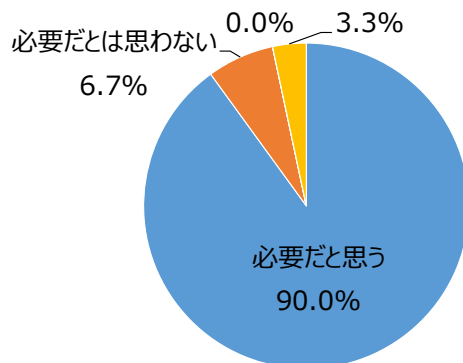
ワークショップで自分の意見を発言できたか？については、「できたと思う」と「まあできた方だと思う」を合計すると95.6%と、9割以上の参加者が自分の意見を発言することができたと回答しており、「できなかったと思う」は0%だった。



③ 今後も市民と行政が気軽に
話し合う機会は必要だと思うか？

今後も市民と行政が気軽に話し合う機会は必要
だと思うか？については、「必要だと思う」が
90.0%と最も多く、「必要だとは思わない」は6.7%、
「分からない」は0%だった。

〔今後も市民と行政が気軽に話し合う
機会は必要だと思うか？ N=30〕
分からない 未回答



④ 今後のまちづくりに期待すること（自由意見）

今後のまちづくりに期待することは以下のとおり。

〔今後のまちづくりに期待すること（自由意見）〕

| No | 回答内容 |
|----|---|
| 1 | 子育てしやすい環境づくり、雇用の創出、人口増。 |
| 2 | とにかく子ども（人）が増える街づくりをお願いしたいです。 働く場として、企業誘致だけでなく、農業・漁業をもう少し生かしてもいいかもしれません（国際的に競争できる形で。） |
| 3 | 今回、意見を言う、語り、聞くことのできる場が、とつてもありがたく思いました。一人の考えでは進まないことも、他の意見を聞き、考えが、正しいのか、間違っているのかの判断ができたと思います。ますます、明るく、生きやすい垂水であればと思いました。 |
| 4 | たくさん魅力があるので内外にアピールしてほしい。特に内に浸透すると、自然と外にも向いていくのではと思います。無理なく無駄なく楽しく取り組める活動を行っていくことで、自然と笑みがこぼれ、それがまた魅力になっていくと思います。 |
| 5 | 様々な意見・要望を1つでも多く取り入れてもらえれば住んでみたい町になっていくのでは |
| 6 | ・垂水市のアピール強化 ・一時預かりができる場所を作ってほしい。 |
| 7 | 子どもを育てる環境が整えば、3人・4人出産すると思う。（共働きができる環境・子どもを預ける環境）中央地区しか学童がないので、住所を移して中央地区に移る人もいる。どこの学校でも学童があれば、複式学級も無くなるのではないのでしょうか？働ける環境があれば、家も建てることも考えると思う。垂水市は灰が降るのに、眼科健診が適当すぎるような気がする。（親まかせ）小学校でひっかかって手遅れの事が多いと聞きます。眼科の先生に診てもらいたい。 |
| 8 | 垂水に生まれ育って良かったと思える市になれば、自然と定住者が増えると思うので、子供たちがそう思えるような環境づくりに力を入れてほしいです。環境＝福祉の充実（病院、保育園、教育施設の充実）どんなに定住をすすめても、環境が良くなければ定住にはつながらないので、垂水に特化した独自の支援をしてほしい。前田先生の解説がすごく分かりやすく勉強になった。市の人口が少ないので、世代関係なく全体で子育てできればいいと思います。 |
| 9 | さまざまな団体で活動していらっしゃる方々の意見を聞くことで、多方面からの話が聞けると思います。参加させていただき良かったです。住んでいたいと思える垂水になるように少しでも力になればいいと思います。 |
| 10 | 1人の意見の裏に150人分がかかっているとわれ、緊張しました。短い時間の中での意見交換でしたが、この中から1つでも実現できる事があればいいなと思いました。 |
| 11 | 鹿児島市、鹿屋市、霧島市が近い利便性を生かしたベッドタウン化。→県営・市営住宅の増設や空き家活用。 |

〔今後のまちづくりに期待すること（自由意見）（続き）〕

| No | 回答内容 |
|----|--|
| 12 | 1.各校区に海水浴場を設けられないか検討する。 2.子供たちに自分の進みたい方向を聞き、それを実現するには、どうしたらよいか検討する。（プロの指導者を!!体育なら合同の組織を作る。芸術・学問など方向を探る。） 3.お年寄りとのふれあい活動を、現在やっているが、全て自分で学校に来れる人が中心。養護施設に入っている人とか、自宅居住の方など。 |
| 13 | 若い世代が住み続けていける街になってほしい。 |
| 14 | 子供達が一生涯「垂水で過ごしたい」と思えるまちづくりであってほしい。また、県外へ一度出ても「あー故郷へ帰りたい、帰ろう」と思える町づくり。 |
| 15 | 安心・安全住みよい町に |
| 16 | 子は宝であるので、もっと子供を中心に政策など考えれば、垂水市も人口が増えると思う。今日も、子どもがいる人を前提に集まっているのに託児がないのはおかしいと思った。日曜日の昼間は保育園もやっていないので困ります。 |
| 17 | こういった会で意見を吸い上げてもらえるのは嬉しい。150人を代表して発言できたか不安だが、色々もっと他の市民の方も意見があったら申し訳ないとも思った。単純に要望をあげるのではなく、こういったワークショップという形式で、みんなで考えていくのはとても良いと思いました。その上で子供達のためにどうしたら大きな夢を描けるのだろうと、まだ考えが及ばなかった部分もあった。 |
| 18 | 未来の垂水市を作るのは、今の子供たちなので、この先も垂水市に住み続ける環境を作ってほしい。（働く場所など） |
| 19 | 学校を卒業しても垂水で働いて家庭を持って子育てを楽しめるまちであって欲しいです。垂水のこれからを小さい頃から考える機会があれば良いと思います。 |
| 20 | 垂水の人口減少にならないように手をうつ。医療機関、遊ぶ場を多く充実させてほしい。住みやすい住宅（子ども中心）をつくってほしい。 |
| 21 | 人口減少をストップさせる為には、子どもたちはもちろん、老後垂水市で過ごす私たち世代にとっても、医療・福祉の面で、安心して充実した生活ができるように市や住民で真剣に考えていかなければならないことだと思います。 |
| 22 | 良い意見を聞くことができました。各家庭・人は同じような思いで子育てしているんだと、改めて気づきました。同じ思いの親が育てた子どもは健康で素晴らしい成長をしますと考えます。この機会は貴重でした。ありがとうございます。 |
| 23 | ・子育て世代が集まるような働き口を作ってほしい。 ・本屋がほしい。 ・垂水の自然や食べ物をもっとアピールして人を集める場を作ってほしい。 |

以上